

ベストセラーの発掘：
井伏鱒二「故篠原陸軍中尉」と徳富蘆花「寄生木」

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須田, 喜代次 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1285

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ベストセラーの発掘

——井伏鱒二「故篠原陸軍中尉」と徳富蘆花「寄生木」——

須田 喜代次

I 忘れ去られたベストセラー

一九六一（昭和36）年八月から一年間、十二回にわたって『新潮』誌に連載してきた「武州鉢形城」を、一九六二年七月に完結させた井伏鱒二が、次に『新潮』誌上に発表した作品は、三箇月ほど時間をおいた同年十月号掲載の「故篠原陸軍中尉（「寄生木」のダイジェスト篇）」であった。そしてこの二作品は一本にまとめられ、翌一九六三年三月、『武州鉢形城』と題されて新潮社より上梓される。

一九〇九（明治42）年十二月刊行以来わずか五年で三十六版を重ね、好評を以て世に迎えられた、およそ半世紀前のベストセラー小説・徳富蘆花「寄生木」の、「ダイジェスト篇」とわざわざ銘打って発表された本作品は、早速翌十一月号の『群像』『創作合評』において取り上げられることになる。合評担当者は、北原武夫、高見順、平野謙という当代きつての三人の目利きだ。

北原 最初に井伏さんの「故篠原陸軍中尉」(新潮十月号)。作者らしい私という主人公が、小田さんという知人のもとに或る日借りた本を返しにいくと、小田さんが昔友人からもらった手紙を記念のために表装した巻物のようなものを見せてくれる。署名は小笠原善平となつている。これこそ「寄生木^{やどりぎ}」の主人公篠原良平のことなので、そこから話が弾んで、そのときの小田さんの話や小田さんの持つている「篠原良平に関する小田須美平氏の談話」と称する速記録などが材料となつて、篠原良平のいわゆる数奇な一生がここで綴られることになる。

作品「故篠原陸軍中尉」の枠組みに関して右の北原の要約は必要にして十分であつて、これ以上付け加えるべきものはない。が、以下梗概を述べる部分の最後で、北原は何とも奇妙な発言をしている。

……この篠原良平という男は、その後外国語学校ロシア語科に入つたりして民間人の生活をはじめるが、乃木將軍夫妻が自決したのを聞くと、自分も自殺してしまう。その動機も前後の事情も「寄生木」には詳しく書かれているのかもしれないが、わざとかどうか、井伏さんは書かれていない。その辺は以上の挿話の重なりから読者に想像させるようになつている。「寄生木」のダイジェスト篇)という傍題がついているが、そういう小説です。(傍線須田、以下同様)

これでは篠原良平は、明治天皇に殉死した乃木夫妻の、そのまた後追い自殺をしたかのように読めてしまう(厳密に言えば、現実世界の住人「乃木將軍夫妻⁽²⁾」と虚構世界の住人「篠原良平」は、同一空間には存在しないはずなのだが、それはひとまず措くとしても)。

さすがに平野謙はすぐさま傍線部については訂正をしている。

平野 今のすじがきは実にうまく要約されていますが、ただ乃木將軍が自決してから篠原良平は死ぬのでなくて、すでに明治四十一年ごろに篠原は死んでいて、たしか「寄生木」を乃木將軍は読んでいたはずですね。

このような間違いをするようでは、北原は書評すべき本作品をちゃんと読んでいたのだろうかという勘ぐりすらしたくなりそうだが、「その動機も前後の事情も「寄生木」には詳しく書かれているのかもしれないが」という彼の発言からは、井伏がダイジェストした原作である、徳富蘆花「寄生木」は、この時点で彼の視野には入っていないことが分かる。

否、当の「寄生木」が視野に入っていないのは北原だけではおそらくない。否、否、「寄生木」が視野に入っていないというのは正しくない。おそらくは依拠テキストの関係で、作品「寄生木」の内容が正しく把握できていないと言わなければならない。

と言うのも、原作の蘆花「寄生木」を合わせ鏡としてこの時の批評を展開した人物がいるからである。それがもう一人の合評者・高見順だった。

高見 ……これは「寄生木」のダイジェストと傍題があるけれど、ちがいますね。はじめ小田須美平との会話みたいなところがあるでしょう。ぼくはこういう会話をほんとのことかと思つて読んでいたんですが、疑問を感じたのは、「小笠原善平が自殺する前によこした最後の手紙」とその小田さんが言つて、その次に「蒲団をかぶつて短銃でここを（眉間のところを指差し）撃ち抜きました」と言っている。ところが小笠原善平は蘆花の手紙によると自殺したんじゃないんだ。事実は病死なんですね。蘆花は終始「悶死」と書いています。

この高見発言に対しては、平野はすぐ続けて「そこが井伏流なのかな」と応じてしまっている。「いや、小笠原善平は自

殺したんですよ」という類の彼の発言は一切ないのだ。

しかしわたたくしはここで高見順や平野謙の不明を責めるつもりなど毛頭ない。周知のように「篠原良平の最期について。小説寄生木後の巻に於て、著者は明治四十一年九月二十日篠原良平は二十八歳を以て故山に病死した、と書いた。然し此は事実で無い。彼良平は病の手には死な、かつた。彼は足歩あゆみののろい死の使者つかひを待ちかねて、短銃びすとるを以て自殺したのである」と蘆花自らが記すのは、一九一四（大正3）年九月一日の日付を付す「縮刷 寄生木序」においてである。だからこの時高見順が扱ったテキストが縮刷版以前のものであれば、著者の蘆花自身がそう信じて疑っていなかった如く、良平の死を「病死」と捉えるのはむしろ当然であるだろう。蘆花は「故山に病死した、と書い」ているわけなのだから。

さらに「私は小田さんの宅から帰って来ると、さっそく蘆花全集で「寄生木」を読みはじめた」とある「故篠原陸軍中尉」中の「私」と同様、一九二九（昭和4）年五月刊行の『蘆花全集 第八卷』（新潮社）を高見が繙いたのだとしても、そこで目にすることが出来る本文は縮刷版以前の本文であり、そこに前述した「縮刷 寄生木序」は掲載されていないのである。もっとも、この井伏作品が発表された一九六二年十月という時点で言えば、遡ること六年、一九五六年二月に岩波文庫の一冊として「縮刷 寄生木序」を含む『寄生木（一）』が刊行（3）されていたのではあるけれども。

だからこの高見順の指摘は、結果的に誤りであったとはいえ、やむを得ない要素が多分にあると言っている。

が、しかし高見は後にもう一度「蘆花は小説として自殺とも取れるような書き方をしているがほんとうは病死だ。それを自殺としたのは井伏さんらしい。（略）ぼくは元通り病死にしておいたほうがよかつたのじゃないかと思う」とも発言している、一貫してそこに井伏の作品生成上の重要な仕掛けを見、作品評価にも繋げているのである。

繰り返すが、たとえやむを得ない点はあつたにせよ、こうした作品生成の根本部分を捉え損ねた上に展開される「合評」は、作者である井伏自身にとっては不本意なものではあつたに違いない。

だいぶ後年のことになるが、この「合評」に関して、井伏自身の発言が残っている。

私は篠原中尉の無軌道ぶりを「やどり木」で調べ、篠原を偲ぶ大場さんの談話で確かめながら書いた。この作品は最悪の駄作だと言はんばかりの評を受けた。「群像」の座談会でそんなやうに言はれた。六月から書きはじめ、八巻さんのところで二箇月かかつて仕上げた作品だが、自分が落ち目になつて切ないことであつた。（荻窪（七賢人の会）初出『新潮』一九八二・六、『荻窪風土記』一九八二・十一、新潮社）

たしかに三人の合評は本作品を好意的に捉えたものではないとはいえ、「最悪の駄作」と言うほどの酷評であつたわけでもないのだが、全く自分が意図していなかった次元での批評はよほど印象に残つたのか、作品発表から二十年経つた時点でもこの時の「合評」は井伏の記憶にしっかりと刻まれている。

が、わたくしはここで同時代評がいかにも外的であったかということをつらぬいてはならない。そうではなく、ここでわたくしが確認したのは、一九六二年という時点において、第一線で活躍する文芸評論家・実作者であるこの三人にとつてすら、既に「寄生木」はその内容を睨と把握できないほどに遠い存在の作品になつてしまつていたことなのである。かつて平岡敏夫が一九八五年五月に刊行された『日露戦後文学の研究 上』（有精堂）において、「『寄生木』を今日読む人はすくなく、また本文自体が容易に入手できぬような状態で、読むことも困難なのである（本稿再校中、岩波文庫本が復刊された）」と述べていたように、仮に『寄生木』出版当時「蘆花の文名は高かつた。若い読者に人気があつた。「寄生木」を読まない女学生は、女学生の恥だとされていくくらいである」という井伏作品中の記述をそのまま信じたとしても、——同じく蘆花作品の「不如帰」⁽⁴⁾はともかくも、「寄生木」を「読まない女学生は、女学生の恥だとされていた」というのは、わたくしには俄に信じがたいことではあるけれども——一九六二年の時点でもすでに「寄生木」は忘れ去られたベストセラーになつていたわけなのだ。その意味で作中に登場する「篠原良平に関する小田須美平氏の談話」をいち早く「井伏さんの創作だろう」と見抜いた平野謙が、その理由として「戦後になつてから小笠原良平⁽⁵⁾のことを特に知りたい

ような酔狂な雑誌記者なり新聞記者はあり得ないと思う」と述べているのは、まさに正鵠を射ていたということができるとは違いない。

つまり鷗外の言葉を借りるなら、ここで井伏は「寄生木」という作品をいわば「墓の中から掘り出」(「杯」)すようにしてそのダイジェスト篇を呈示しようとしたことになるわけなのだ。その文学的営みの意味するところは一体何なのだろうか。

以下、井伏作品史の中で、これまでほとんど検討の俎上にあげられることのなかった「故篠原陸軍中尉」という作品に照明を当てることによって、一九六〇年代前半、すなわち「黒い雨」(『新潮』一九六五・一―一九六六・九)連載前夜の井伏文学の一側面を照射することを試みたい。

II 大場弥平との出会い

去年の春から中野の小田さんに「孫子評釈」と「日露戦役におけるコザック従軍記」を借りていた。

作品は右の一文を以てその幕を開ける。この二冊の本(わたくしが調べ得た範囲では当該題名の書物は見いだせず、おそらく架空のものであろう)を返却するために「小田さん」宅を訪問したことをきっかけに、物語が展開することは「I」章において確認した北原武夫の要約通りである。ところで、右に引用した本文は、本作品が収録された『武州鉢形城』(一九六三・三、新潮社)を底本とする新版『井伏鱒二全集 第二十二巻』(一九九七・九、筑摩書房)に拠ったのだが、『井伏鱒二自選全集 第五巻』(一九八六・二、新潮社)では、「小田」という架空の人物名ではなく、そこは大場弥平という実在の人物名に改められている。

去年の春から中野大和町の大場弥平さんに「孫子評釈」と「日露戦役におけるコザック従軍記」を借りてみた。

本作品執筆のきっかけが大場弥平⁽⁵⁾（一八八三・十二・十五～一九六六・五・十）宅で見た大場宛小笠原善平書簡ならびに同氏からの取材であったことは、単行本『武州鉢形城』・「あとがき」、前述『荻窪風土記』、『自選全集』・「覚え書」において、作者自身が異口同音に伝えるところである。ここでは最も早い『武州鉢形城』・「あとがき」の記述を確認しておく。

「故篠原陸軍中尉」は「寄生木」のダイジェスト篇である。私はこれを書く前に、小笠原善平と乃木将軍のことについて元陸軍少将大場弥平氏から聞いた話を随筆に書こうと思っていた。去年の夏、大場さんの宅を訪ねると、大掃除をしていたら出て来たと言って小笠原善平の手紙を見せてくれた。意外にも乃木将軍に対して激しい口吻をもらしている。しかし大場さんの説明を聞いているうちに、やはり小笠原が乃木さんにあくまでも感謝の念を持っていたことがわかって来た。私はそれについて何枚かの随筆を書こうと思ったが、書くなら長い文章にしろと新潮記者が云ったのでその通りにした。

この記述に従えば、素材と作家との出会い自体は偶然の要素が大きい。しかしここで井伏が、小笠原善平が「意外にも乃木将軍に対して激しい口吻をもらしている」ことに自身の作家としてのアンテナが反応した、としていることにわたくしは注意しておきたい。

実はこの時井伏が大場弥平から見せてもらったものと推定される書簡が、吉田正信「蘆花徳富健次郎と『小説寄生木』」（注1）参照）で紹介されている。当該書簡は、現在岩手県宮古市にある寄生木記念館に所蔵されているもので、一九〇

八（明治41）年五月八日の日付を持つという。この日付は「これは小笠原善平が自殺する前によこした最後の手紙ですかね」という作品中の「小田さん」——前述したように『自選全集』本文では、「大場さん」なのだが、以下本稿では作中の当該人物を指す場合には、「小田さん」に統一して記す——の発言に符合する。因みに小笠原の自死は一九〇八年九月二十日。だからこの書簡はその死の四箇月ほど前のものということになるはずなのだ。作品中では「この篠原良平の手紙、僕に筆記させてくれませんか。雑文原稿に書きたいですから」という「私」の申し出は「いや、そりゃ困るんだ。（略）これは門外不出です」と「小田さん」に断られてしまうのだが、一部分ではあるけれども、別の角度からそれは発掘されていたのだ。以下、吉田氏調査の当該大場弥平中尉宛書簡を引用させていただく。

乃木希典氏とは主義の相反する所あり余ハ過日来絶交せり然れども仙台以来の恩義は夢寐の間これを忘れざるなり天下何者も恐るなし然し恐るゝは病にあり小生右腎臓非常にあしく剔出せんも身体疲労手術をゆるさず

吉田氏は「ここでは乃木將軍との精神的袂別が明言されている」とするが、たしかに「絶交」という言葉は、かなりのインパクトを以て迫ってくる。乃木希典に絶交を突きつけた若者、そこに井伏は何を見ようとするのか。

III 五十年前の記憶

井伏ならぬ作品「故篠原陸軍中尉」の語り手「私」は、「小田さんの宅から帰って来ると、さっそく蘆花全集で「寄生木」を読みはじめ」ることになる。中学生の時に読んで以来「殆ど五十年ぶり」の再読である。そして彼は五十年後の今日まで「薄ぼんやり覚えていた」場面が二箇所あったことに気づく。その一つは良平が誰の紹介もなしに初めて乃木希典

に面会する場面、そしてもう一つが「良平が乃木將軍の書生になって一箇月ばかりして、將軍のお供で台湾へ行く途中に副官が云った言葉」であった。この二箇所を「寄生木」本文から抜粋引用した「私」は、「抜粋の箇所が微かながらも私の記憶にあったのは、一つには岩手県の田舎言葉と備後の私の田舎の言葉が（文字で現すと）似通っていたためだろう。他にも何か理由があるかもしれないが、いずれも蘆花が良平の原文に筆を入れないで（会話に於ては其一字一句を愛^わんだ。出来得るかぎり良平をして自ら描き自ら語らしめた」と云うところの一部分である」と述べている。

たしかに蘆花は、「私」が引用するように、作中の会話文には手を入れていないと「小説 寄生木序」において明言しているのだが、しかし実はこの「私」が敏感に反応した「寄生木」中の会話部分こそは、篠原良平ならぬ小笠原善平稿本に蘆花が手を入れた数少ない箇所であったことが、現在では明らかにされている。

小笠原善平が残した「寄生木」稿本四十冊は、現在前述した寄生木記念館に所蔵されているが、未だ全容の公開には至っていないようである。が、かつてこの稿本の調査をした中野好夫によれば、「寄生木」中の会話は、「蘆花自身も「会話に於ては其一字一句を愛^わむだ」というように、たしかに会話は、ほとんど稿本そのままが生かされているが、ただ面白いのは、稿本での善平の発言はすべて標準語であるのに、「寄生木」では一貫して方言調に改められている」（『蘆花徳富健次郎 第二部』一九七二・九、筑摩書房）のだという。中野氏は、この「方言調」に関して、当時市立図書館館長補佐であった齊藤太一氏の「よく宮古地方のそれを写している」という発言も合わせ紹介している。当然のことながら作品執筆段階の井伏は、中野氏の綿密な調査など知るよしもないはずなのだが、彼の分身とも言うべき「私」は、蘆花の文学的苦心の作業^⑥に正当に反応したことになる。

ごく初期の作品に文字通り「言葉」（『桂月』一九二六・四、七）と題する作品があるように、言葉、特に郷里・備後の言葉に関しては、文学者・井伏鱒二の一貫した関心事であったことは周知の通りである。「マレー作戦従軍中」に遭遇した「その言葉の訛^⑦からして、間違いなく私の生れた村の近くから来ている郷土部隊」を素材に、「行方不明になったかどうか

も不明だという消息談」を記し、「爆弾池のほとりで見ただケやんの声が太く、カンやんの声が若々しかったことだけは、まざまざと印象に残っている」と彼等に思いを馳せる「郷土部隊」を発表するのは、「故篠原陸軍中尉」発表からわずか七箇月後（『オール読物』一九六三・五）のことである。

さらに本作品に関して「言葉」ということに着目するとすれば、他にも、家出同然で盛岡へ出て来た良平を迎える「宿屋のおかみ」の「まんずまんず、お上りやんせ」という「盛岡弁の優しそうな鼻声」や、「監獄弁当の差入屋兼宿屋」の主人の「宅でも旅店の商売、おいやで御座りせんなら宅にお出でア。そう分け隔てしなくッてもいいじゃ御座りませんかや。どうで御座りす」といった「気のきいた言葉」が、「寄生木」から抜粋されて、傍線部のようにその言葉を好意的に受け止める「私」の思いともども書き留められている。

だから「備後の私の田舎の言葉」に「似通」う言葉をしゃべる良平という一青年は、本来書き手がシンパシイを抱く要素のあった青年だったと言えるのではないか。

しかし「寄生木」を「調べ」た上で井伏が書いたのは、「篠原中尉の無軌道ぶり」（前記『荻窪風土記』）なのだった。

IV 「篠原良平」という青年

雑誌に出した後で大場さんに聞くと、まだまだ小笠原を弁護する余地がある筈だという意見であった。（『武州鉢形城』・「あとがき」）

本作品執筆に当たって、井伏に作品生成に関わる基礎的な資料を提供した実在の大場弥平は、後に本作品の印象を右のように述べたという。小笠原善平とその青春の日々を共有した大場が、井伏に期待したものはたしかに小笠原の弁護であっ

たのかもしれない。が、しかし「寄生木」をダイジェストする過程で浮かび上がってきたのは、そうした大場弥平が期待したような「篠原良平」像ではなかった。

例えば、速記録「篠原良平に関する小田須美平氏の談話」で「記者」と「小田」は次のような対話を交わす。

記者——それで篠原良平のことですが、戦地で彼が自分の部下を斬ったのは、やはり豚を斬った軍刀で斬ったのですか。

小田——残念ながら、どうもそうだとしか思えない。

記者——彼のごときは、ときたま東北人に見る破滅型の人ではないでしょうか。

小田——石川啄木もね。いっこくなどころ、自負心の強いところ、気が弱いのに衝動的に常軌を逸するところが、非常識な行為となって破滅型ともなるんだろう。

記者——性格的に云って、良平のお天気屋さんのところは曾祖母に似て、非常識で頑迷なところは父親に似ていますね。破滅型のところは、ある種の次男三男の宿命なんでしょうか。

小田——東北人の次男三男にはよくその傾向があるね。第三者から見れば身勝手なところもある。(略) そういう風に発作的に常軌を逸する激情の持ち主だ。

かなり偏見に満ちた裁断とは言えようが、作中の「小田」を含め、実在せぬ架空の速記録フィクションを作中に登場させて、ダイジェストした「寄生木」の記述を照らし出す光源の一つにせんとする「私」に、良平に対するシンパシイはどうも感じられそうにない。

右の対話の冒頭で、「豚を斬った軍刀」云々と出てくるが、依拠資料である「寄生木」では

我砲兵が発射すると、彼方は伏姿して右方村落に入った。砲兵は連絡をとり、工兵は爆裂薬で木を倒して居る。ロスの弾丸で二頭の豚兎が死んだ。良平はロスと思ふて死んだ豚兎を切つたら、刀の刃こぼれがした」(以下「寄生木」からの引用は、岩波文庫版・一九八四・十一、に拠る)

とされる箇所であり、この箇所を「気が苛立っている良平は敵を憎むのあまり、かつとなって露兵の代りに転がっている仔豚に斬りつけた。刀の刃こぼれがした」とまとめた「私」は、

この場合の良平の所感は、「寄生木」には一言も記していない。しかしその軍刀は、云うまでもなく乃木さんから拝領した乱れ焼刃の大業物である。(略)いくら気負っていたとは云え、転がっている豚の仔に向つて刀を鞘走らせるといふのはどんなものだろう。良平としては血刀を見てどんな気持であつたらう。自分は剣術が下手だから刃こぼれがしたと思つたらうか。乃木さんに対して相すまぬと思つたらうか。

というものである。良平への批判的視線は明らかだ。

さらにその軍刀で、軍紀違反をした部下を良平は問答無用とばかりにいきなり斬りつける。

「何故ッ軍紀を破つたか。」

右拳に渾身の力をこめて良平は面を殴つた。

心の迷ひか、眼の狂ひか、倒れか、つた兵卒は、身を起しざま抵抗しさうな容子をした。

「おのれッ。」

軍刀拔打に良平は其腰に切りつけた。

今一刀と刀をひく途端、膽を飛ばした兵卒は、両手でしつかり白刃を握つて放さぬ。良平はもぎ放さうとする。駆け来つた特務曹長が、

「まあ、お待ちなさい。」

と堅く良平の右手を握つた。

なアに、人を殺せば自分も死ぬだけだ。と、烈火の憤怒に前後を忘れた良平の頭脳は忽冷たちまちひや、かになつた。あッ、つまらぬ事をしてしまつた！（「寄生木」）

この時良平に斬られたのは、「若月一等卒」という人物で「平素忠実な男で、二〇三高地以来の勇士」だったのだという。右の部分をダイジェストして抜粋した井伏作品の「私」は、一言「つまらぬことをしたものである」と明確に良平の行為を切つて捨てる。

事件直後に「憲兵が来て現場検証の上で調書を取つて行く。「これは軍紀の上で当然の取調べ」なのだが、「またしてもかつとなつた」良平は、「ままよ、ビールの栓ぬきのように、不平ある世にひねくれ放題ひねくれて見よう」などと独りごつ。そうした良平の言に対しても「私」は「無法者のような言葉を放っている」とし、「乃木さんから頂戴した刀をよごしたことには一言も触れてない」ことを指摘するのだ。

さらにこの「若月一等卒」は幸い命を取り留めたのだが、「良平が手を負はせた若月一等卒も、経過が宜よいと云ふので、看護手に扶たすけられ、支那車両に運ばれて、追及してきた」という原作「寄生木」の記述を踏まえつつ、「私」はそれを「若月一等兵も看護手の付添で前線に送られている。まだ完全に治りきつていたのではないだろう」と自己の思いを付与して記し、そこに軍部の非情な判断を匂わせた上で、

この一等兵がもし今日でも健在なら、「いや、小隊長殿はお天気屋さんでした。特務曹長殿は出来た人でした。とにかく、二度と戦争に行くもんじゃない。」とでも云う老人になっているだろう。〈五分前だ、五分前だ。犬を殺したのが五分前だ。斬られたのも五分前だ。〉犬を殺すと同時に、査問もなしにお手討にされたという意味のようだ。

とする。こうした「故篠原陸軍中尉」の記述を押さえていくと、前述した高見順の発言の文脈とは別の意味合いだが、この作品は小説「寄生木」のダイジェストではないと言っている。それはダイジェストする「私」の思いによって強く染め上げられた「寄生木」と言ったらいいだろうか。このエピソードにしても、井伏作品の「私」は、良平ではなく、この歴史の彼方に消えた「若月一等卒」に寄り添う形でその記述を進めている。その目は、指揮官という重職にありながら冷静な判断力も備えず、感情の赴くままに無軌道に行動する一人の若者の理不尽な刃によって重傷を負わされ、さらには「まだ完全に治りきっていない」のに最前線に送られる無名の一兵士の姿と、そういう判断を下す軍部の有り様にこそ向けられているのだ。この視線は「寄生木」の作者・蘆花にはない。

この若月一等卒事件は「臆病者でありながら人一倍に短気で、かっとなったら何をやらわからない」という良平の性格を示すものとして物語の終盤で再度確認される。「小田さん」の談話を記す前記「速記録」は本作品中にしばしば引用されているのだが、その紹介される最後の談話においては、良平という人物を「小田さん」自身が

彼は自分が聊か幸福に恵まれると、自分に恍惚とてしまう。一種の酔っぱらいだと思えばいい。將軍のうちに書生になり、官学である陸軍の学校に一番で入学する。憲兵隊長に美人の娘を貰ってくれと頼まれる。当時の貧書生の最大最上の理想である。自分で自分に恍惚とする。

とかなり辛辣な厳しい見解を良平自身に下すことになるのである。

*

*

周知のように、「寄生木」が世に送り出された直後、篠原良平を長井代助と比較して「代助も良平も悪人ではない、寧ろ善人である。しかし代助にはノブルな処があるが良平にはノブルな処がない」とし、良平を「自分に寛大にして他人に厳格である、他人と同等に自分を置き、稍もすると他人以下に自分の人格を下げることを避けない」としたのは、武者小路実篤だった（「代助と良平」『東京朝日新聞』一九一〇・四・十二）。また「この作品から看取されるかぎり、おそらくわたしの偏見ではあるが、どうもこの人物、わたしとしてはあまり好感の感じられそうな青年ではない。不幸な運命に憑かれたともいうべき短いその一生に関しては、もちろん同情を禁じえぬが、ひるがえってまた他面から見れば、相当に我執の強い、そして世俗欲も名誉心も、ともに強烈な人物だったらしく思える」としたのは、大著『蘆花徳富健次郎』三部作（一九七二～一九七四、筑摩書房）の著者、中野好夫だった。そうした良平に対するアンチパシイは、おそらくは「故篠原陸軍中尉」を書く井伏のものでもあつたに違いない。

ただわたくしが、右の二人に比して、本作品を綴る井伏に特徴的だと思うのは、彼のアンチパシイが良平個人の個性に帰せしめられていないということなのだ。

例えば、原作「寄生木」において旅順総攻撃の様子を二〇三高地から双眼鏡で見ていた良平は「あゝ何と云ふ壯観！」とし、「眼前に開展さるゝこの有史以来未曾有の攻囲総攻撃を躍る胸を以て眺めた」とされるのだが、それをダイジェストする「私」は、「その実、壯観だというその眺望は、敵味方の無数の人間を瞬時に死骸に変化させる作用を持っていた筈だ。あとは見渡す限りの死骸である。いわゆる無言の非戦論ではなかったか」として、眼前の光景に胸躍らせる良平の文言を冷静に批判する。すなわち良平は目前の光景が「無言の非戦論」であることに気づくことはできていない。しかし「私」

は良平には思いも及ばない、そうした視点からこの場面を読んでいるのだ。

しかるにこの「私」の認識は、日露戦争において被弾し人事不省の中捕虜となった、かつての「土屋特務曹長」、現在は八十歳の「見るからに、温顔の御隠居さん」から戦闘の回顧談を聞くという枠組みで展開する物語「御隠居さん」(『新潮』一九五八・一)において、語られる老人の話に対し「とにかく第七中隊の全滅を待たために、この中隊の兵は敵前で南京袋の土嚢を鼻の先に置いて伏せてあるやうなものであった。無言にして最も雄弁なる「非戦論」が、ここにもあるわけだ」とした、回顧談の聞き手「私」の認識に正確に通底する。「寄生木」をダイジェストする「私」がこうした認識を持てる人物であったればこそ、「寄生木」の記述の中に「若月一等卒」への思いを浮かび出させることができたのではあるまいか。すなわち本作品の「私」は、良平という人物を彼がその渦中に巻き込まれた日露戦争との関係において捉えようとしている。であればこそ、「私」は、何の前提もなく、唐突に、いきなり「二十八歳で自決した主人公の陸軍中尉篠原良平の生涯は、偶然ではあったにしても謂わゆる軍部の宿運を暗示しているのではなかったか」と、彼の生涯を半ば強引に総括することになるに違いない。

V 「姿が傾い」た物語

作品叙述を通じて自然に到達した結論というわけでもなく、いわば検証も何もなく、いきなり、しかも作品冒頭部分に近い箇所、ほとんど指し示された良平の生涯を総括する、右に引用した作品記述に関しては、本稿I章で紹介した「創作合評」において、高見順が「こういうことを言うのは井伏さんのためにとらぬね」と批判していた部分であった。

たしかに結論が先にありきという構成であり、またあまりにも露骨な表現は、高見にとっては好ましい表現とは思えなかったのだろう。

しかし逆にそれは、本作品を書く井伏の根底にあったものを窺いしめるのではないか。井伏は『井伏鱒二自選全集 第五巻』・「覚え書」においても、「それにしても篠原中尉のやうに女のことでも、もやもやしてやけを起すのは珍しい。思ひをひるがへすといふことは出来なかつたらうか。戦争のせりもあつたらう」と記す。そこには、何としても「無軌道な」良平の生涯を、一九四五年八月までうち続く「軍部の宿運」に重ねようという作品生成への強烈な意志があつたように思える。結果としてそれは作品自体の自然の帰着というよりも、やや強引な結び付けのようにも思われるのではあるけれども。本作品を収録した『武州鉢形城』の「あとがき」において、彼は次のように述べていた。

「寄生木」は小説ではなくて小笠原善平の人生記録である。終りの方は男女の取交した何通かの書翰だけを並べてある。私はこの部分を抄述する工夫がつかなくて、物語として姿が傾いているように締めくくることが出来なかつた。

「物語として姿が傾いている」とは分かりにくい表現だが、それは「終りの方」を「抄述する工夫がつかない」かつたが為に、作品全体のバランスが取れなかつたことを言ったものだと思われる。そして「姿が傾いた」、その一要因こそは、作品全体のバランスを崩すほどにやや強引とも言えそうな、自己の主張を前面に押し出す、自身の本作執筆の姿勢にもあつたのではなかつたらうか。

『武州鉢形城』刊行（一九六三・三）以後、「戦死・戦病死」（『小説中央公論』一九六三・四）を書き、「忘友中村地平」（『新潮』一九六三・五）を書き、その続篇である「南方ぼけの頃」（『新潮』一九六三・六）を書き、前述「郷土部隊」（『オール読物』一九六三・五）を書き、「芦安一等兵」（『中央公論』一九六三・五）を書く井伏のこの時の文学的営みの方向性は明らかだ。そして「自然はこんなに美しいのに、なぜ人間は戦争なんかするんだらう」（「南方ぼけの頃」という忘友・中村地平の言葉を記す井伏の、作品生成へのベクトルも明らかだろう。そうした作家としての営みの延長線上に、「備後小島

町の重松さん」は登場してくる。そして「無口な重松さんは、原爆が落ちたときのことをぼつりぼつり話してくれた。その「挿話」が綴られることにもなる（「片割草紙」『新潮』一九六三・八）。

「黒い雨」への序奏はすでに始まっている。

注

(1) 「小説寄生木も版を重ねるすでに三十六、而してこのたび新に其の三十七版として縮刷を出すことになった。」(大正三年九月一日付「縮刷 寄生木序」、引用は岩波文庫版『寄生木 (二)』一九八四・十一、に拠る)。

吉田正信に「一九〇九年(明治42)十二月八日、『小説寄生木』が「徳富健次郎著」として警醒社書店より刊行された。それは一九一三年(大正2)十月には三十六版を重ね、そのあと縮刷版に変わって一九一六年(大正5)四月では四十三版を数えている。好調な売れ行きであったといつてよい」(『蘆花徳富健次郎と『小説寄生木』』『国語国文学報』第六十集、二〇〇二・三)という指摘がある。

また、井伏作品中にも引用紹介されている「蘆花全集附録の「寄生木 解題」(沖野岩三郎)」には、『寄生木』の多額の印税をめぐる遺族と蘆花との関係が記され、さらに中野好夫『蘆花徳富健次郎 第二部』(一九七二・九、筑摩書房)は、「(須田注・明治)四十三年二月十日付、某氏宛蘆花書簡によると、発売後わずか二ヵ月にして、すでに一万三千部が売れたとある」とする。

(2) 言わずもがなのことだが、作品「寄生木」では、「乃木」をモデルとする人物は、「大木」とされている。

(3) 岩波文庫版『寄生木』は全三冊で、それぞれの第一刷は、(一)が一九五六年二月、(二)が同年八月、(三)が一九五七年二月。そして一九八四年十一月に三冊同時に復刊された。

(4) 「蘆花の「不如帰」を知らない人は殆んど稀れであらう。」(井伏鱒二「不如帰と民衆」『春陽堂月報』一九三〇・三、後に前半部分のみを「初めて見た映画」と改題して『田園記』(一九三四・五、作品社)に収録)。ただし同文中には「最近の傾向では、人々は「不如帰」などを見て泣いたり熱狂したりしては物笑ひになるとでも思つてゐるらしい」ともある。

(5) この大場弥平について、井伏は「大場さんは少尉時代に日露戦争で負傷した軍人だが、陸大を出て旅団長までに進み、或る事情で腹に据ゑかねることがあつて、陸軍省の一人の上官を撲りつけて少将で退官になった。古くなつた軍人である」(前掲「荻窪(七

賢人の会』『荻窪風土記』と紹介している。

この記述から、この大場こそが「それについて私は、六無軒叟人に問ひあはせの手紙を出した。前に書いたやうに、この老人は元軍人だが、旅団長のとき本省の上官をぶんなくつたので、満州事変当時には、すでに退役になつてゐた」とされる、前作「武州鉢形城」において「私」が何かと頼りにする「六無軒叟人」のモデルであつたことが分かる。なお、大場は一九三一（昭和6）年八月二十九日、陸軍少将で退官、予備役となつた。

(6) この改変に関して、平岡敏夫は「前掲中野氏の指摘にあつた、方言調と口語体に稿本を改めている問題から入りたいが、「思いまして」を「思ひやんして」と方言調にしたことの意味はきわめて深いように思われる。他にも「居ります」が「居りやんす」「誰にもききません」が「誰にも聞きやんせん」などと改められ、方言的というよりも農民的と言つてよく、いわゆる百姓ことばになつている。田舎の高等小学校を出たひとりの少年の姿が浮かびあがるようになってはいるが、これは口語体に改めたことと密接な関係がある」（徳富蘆花『寄生木』『日露戦後文学の研究 上』（一九八五・五、有精堂）と指摘している。